第一言語習得を普遍文法の観点から考える

阿　部　　潤

「子供はどうやって言葉を獲得したのか」という問いに対して，たいていの人は，「親や周りの大人に教わることによって」と答えるのではないであろうか。このように，知識は専ら経験から得られるとする立場を哲学では経験主義（empiricism）と呼ぶ。これに対して，Noam Chomsky が提唱する生成文法理論は，言語知識の中核部分が生得的なものに帰せられるという点において，合理主義（rationalism）の立場を取っている。「言語知識の中核部分」とは, 言ってみれば, 個々人が言語を操るために脳に備わっていると考えられるある体系化されたシステム（Chomsky の立場では, 大雑把にこれを「文法」と呼んでいる）のことを指す。従って，Chomsky が問題にする「言語知識」とは, 語彙の意味や起源といった, いわゆる「言葉に関する意識化できる知識」というようなものではなく,「無意識のうちに身に付けている言語の形式上の規則性に関する知識」とでも言えるようなものである。このような知識について，Chomsky は，子供が接する経験から得られるとは考えがたく，それを生得的なものと見なすのが最も自然であると主張する。

この Chomsky の立場によれば，子供には，生まれたときにすでに遺伝的に組み込まれた言語能力の「設計図」が備わっており，大人の言語能力の多くの諸特性やそこに至るまでの発達経路がそれによってあらかじめ定められていることになる。この生得説の立場を支持するものとして，例えば，どんな子供でも，病理的な問題を抱えていない限り，育った環境で話

されている言葉を，単にその言葉にさらされるだけで習得することができるという事実をあげることができる。それも，ある言語共同体の中で子供たちは雑多な言語環境にさらされているにも関わらず，ほぼ一様な文法能力を，驚くべき短期間のうちに習得する。こういった事実はよく「刺激の貧困」（poverty of stimulus）という言葉で言い表される。すなわち，言語刺激が貧弱であるにも関わらず，子供たちは一様の文法能力を獲得できるという事実である。言語習得は，従って，自転車に乗れるようになるとか，学校で教わった九九なり算数ができるようになるということとは全く異なった性質の習得であり，どちらかと言えば，鳥が飛べるようになるとか子供が立って歩けるようになるといったものと同列に扱われるべきものである。この意味で，チョムスキーは，言語は習得されるというよりは成長すると考える方がより事実にかなっていると主張する。この議論において一つ注意が必要なのは，上でも触れるところがあったように，今問題にしている言語能力の獲得とは言い換えれば広い意味での「文法能力」の獲得のことであり，語彙の音と意味の関係の習得に関することとは別である。「犬」を英語で dog というのは，ソシュールが言うように，恣意的な関係であり，そういった語彙習得に関しては，上述の文法習得とは異なり，純粋に教わることが必要となる。

それでは，いったいこの生まれたときに既に赤ん坊に備わっていると仮定される文法能力とはいかなるものであろうか。赤ん坊がどこで生まれるにせよ，その育った環境で話されている言葉が何であれ，自然言語である限り，その言葉を獲得できるという事実は，赤ん坊が持って生まれた文法能力はどの言語にも対応できるほどに一般的で普遍的な骨格を成すものであると考えられる。故にこれを普遍文法（Universal Grammar，略して UG）と呼んでいる。他方，赤ん坊がある言語を習得するためには，その

言語にさらされる必要がある。英語が話されている環境で赤ん坊が日本語の文法を獲得することはありえないし，不幸にも耳が聞こえない赤ん坊や狼に育てられた赤ん坊は本来獲得されるべき言語を習得できないという事実は，言語経験が言語習得には必要不可欠であることを示している。以上をまとめると，言語習得は以下のように図示できる。

(1)　UG -> 経験 -> 大人の文法

Chomsky の言語理論の最大の目玉はこの UG を措定するところにあり，これが他のいわゆる一般的「学習」とは異なる言語専用の習得装置として大きな働きを成していると仮定する。

UG を構成する重要なものの一つとしてあげられるのが，「言葉の構造」に関するものである。構造とは，水の構造（H_2O）を例にあげれば，少なくとも以下の二つの特性を備えたものである。

(2)　a.　どんな構成要素から成り立っているか？（水素と酸素）
　　b.　それらの構成要素はどのように結びついているのか？
　　（酸素 1 に対して水素 2）

言葉にも同様の構造を見いだすことができる。以下の文を例にとると，

(3)　a.　John likes Mary.
　　b.　Mary likes John.

2 つの文はそれぞれ John，Mary，likes という 3 つの構成要素，すなわち

単語から成り立っている。しかし，両文とも同じ構成要素から成り立っているにも関わらず，(3a) は「ジョンはメアリが好きである」という意味に対応するのに対して，(3b) は「メアリはジョンが好きである」に対応していることから，単に (2a) に述べた構成要素を考慮するだけでは，これらの文の意味を正しく捉えることはできない。従って，(2b) に述べたような，それらの構成要素の結びつき方が重要な役割を担っていることがわかる。すなわち，それらの構成要素の並び順が大切になる。そして，それぞれの文の意味を正しく把握するためには，それらの並び順に基づいた，以下のような意味解釈規則が存在すると考えられる。

(4) 動詞の前に出てきた名詞はその動詞の主語の役割を果たし，後に出てきた名詞はその目的語の役割を担う。

この規則が与えられれば，どうやって (3) のそれぞれの文に対して，構成要素の意味からそれぞれの文意味が導かれるかを見て取ることができるであろう。その際大切なことは，文の「構造」がどの要素が主語の働きをし，また目的語の働きをしているかを決定するのに重要な役割を担っているということである。

しかしながら，文の構造は上で述べたよりもさらに複雑であることが，次の 2 つの文を比較すると明らかになる。

(5) a. John likes Mary.
b. The man likes the woman.

これまで述べたところによれば，(5b) の構造は「5 つの単語が the - man -

likes-the-woman の順番に並んでいる」ということになるが，これで十分な構造を表していると言えるであろうか。英語を知っている者であれば誰でも気づく通り，(5) の 2 つの文にはある共通した構造があることを見て取ることができると思う。すなわち，(5b) では，(5a) と同様全体が 3 つの部分から成り立っているということである。しかし，この情報は単に単語の線形順序に依拠した構造からは得られない。また，(4) の意味解釈規則を (5b) に当てはめると誤った解釈がなされることにも注目してほしい。この文において，動詞の前に出てくる名詞は man なので，この意味解釈規則に従えば，この名詞だけが主語とみなされてしまうが，事実としては the man 全体が主語の働きをしている。目的語の場合も同様である。これらの事実は，単語がただ単に平板に並んでいるだけと考えるのでは不十分であり，単語の結び付き方には，ある単語の連鎖が他の連鎖よりも結び付きが強いといった減り張りが存在することを示している。(5b) では，表面的には 5 つの単語が並んでいるように見えるが，the-man と the-woman いう連鎖がそれぞれ他よりも強い結び付きを持っていて，その結果，文全体を 3 つの部分に分けることが可能である。この事実を捉えるためには，言葉の構造は単なる平板状のものではなく，重層的または階層的なものになっている必要がある。

この階層的な構造が文の意味に決定的な役割を果たしていることを端的に示す例として，以下のような多義文をあげることができる。

(6)　警察は自転車に乗って逃げていく泥棒を追いかけた。

この文は，自転車に乗っているのが警察なのかそれとも泥棒なのかで，2 通りの解釈が可能であるが，この両義性が個々の単語の意味から発生した

ものでないことは明らかである。それでは，いったいどこからこの両義性が生まれたのか。それは，この文に対して 2 通りの構造を付与することができることによる。大雑把に言えば，一つは「自転車に乗って」というかたまりが「逃げていく」とひとかたまりを成す構造（その場合自転車に乗っているのは泥棒）をしており，もう一つは，このかたまりが「追いかけた」とひとかたまりを成す構造（その場合自転車に乗っているのは警察）をしている。このように，文の意味を決定するのに構造は必要欠くべからざる存在となっている。

もう一つ，構造の重要性を示す例として，英語の疑問文がどのように形作られるのかを考察する。(7) の平叙文を疑問文にするには，(8) のように is を文頭に移動する必要がある。

(7)　The dog in the corner is hungry.

(8)　Is the dog in the corner hungry ?

この場合には，「助動詞を文頭へ移動せよ」のような規則で事足りるように思われるかも知れないが，以下のように文に 2 つの is が存在する場合に疑問文はどのような規則に従って形作られるのであろうか ?

(9)　The dog that is in the corner is hungry.

この文に対応する正しい疑問文は後ろの is を文頭に移動して作られる (10a) であり，最初の is を文頭に移動した (10b) は文法的ではない。

(10)　a.　Is the dog that is in the corner hungry ?

b.　*Is the dog that in the corner is hungry ?

それでは，このように正しい疑問文を形作るためには，英語のネイティブスピーカーはどのような規則に従っていると考えられるであろうか？　例えば，「前から 2 番目の助動詞を文頭へ移動せよ」とか「最も後ろにある助動詞を文頭へ移動せよ」といったような，文の構造を無視したような規則に従っている訳ではないことは，以下の例から明らかである。

（11）　a.　John is certain that the dog is hungry.

b.　Is John certain that the dog is hungry ?

この場合，最初の助動詞 is が文頭に移動している。従って，正しい疑問文形成規則は，文の構造に依拠した形で定式化されていると考えるのが自然である。すなわち，（10a）では the dog that is in the corner が主文の主語としてひとかたまりを成し，文頭への移動の適用を受ける助動詞は，この主文の主語の後ろにあるものと見なすことができる。

さて，これまで言葉には構造が存在すること，またその構造が文の意味解釈や疑問文形成規則に深く関与していることを見てきたが，このような言葉の特性を人間はどうやって習得するのであろうか？　Chomsky の答えは明快である。「これらの言語特性は，赤ん坊に生得的に備わった UG に帰せられる」と。